

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山国際大学現代社会学部
- ・所属ゼミ 伊藤葵ゼミ
- ・指導教員 伊藤葵
- ・代表学生 小林生真
- ・参加学生 竹森もも、田島未悠、東福史菜、太田莉奈、窪田麻梨亜、佐伯綾香、作内風花、桜井愛理、布村綾菜、長谷川泰生、古市敦也

【研究題目】若い世代のウェルビーイング向上について(課題研究部門 No.1)

1. 課題解決策の要約

富山の魅力は「地域住民のあたたかさ」である。しかし若い世代は、地域行事の衰退、進学や就職での県外への移住などにより、「地域との関係」が希薄化している。このことは、富山県の成長戦略の中心に据えられているウェルビーイングの指標において、「生きがい・希望」や地域、富山県との「繋がり」に関する実感が比較的低い傾向にあることから認識できる。

本事業においては、富山県の特性や魅力を活かして、特に若い世代が、生きがい・希望を持ち、ワクワクすることができるような機会をどのように作っていくべきかという課題に対し、「地域交流の場」が解決策であると考え、若い世代が集う「場」のあり方について研究を実施した。

2. 調査研究の目的

本事業では、富山県から課題として提示された「若い世代のウェルビーイング向上について(富山県での学びや経験の環境づくり、ワクワクする機会の創出)」の解決を目的とし、富山県内の若者が中心となって活動している団体への調査を行い、どのような地域交流の場を創出すればよいのかについて調査を実施した。具体的には、地域交流の場に関与することで、「生きがい・希望」や地域、富山県との「繋がり」に関する実感にどのような影響があるのかについて検証を行った。また、交流の場に参加するメンバーが同世代か異世代かという点にも焦点を当て、それぞれの活動における効果についても分析した。最終的には、これらの調査を踏まえた上で、調査団体と協力して、交流イベントの実施を目指した。

3. 調査研究の内容

本事業では、以下のⅠ～Ⅳのフィールドワークを実施した。

I. 若者による交流の場を運営している団体への視察

若い世代が交流している「場」の調査として、Sketch Lab、寄処、みらいのめ、鶺鴒地域食堂、あなろまっち、トミコエの6団体への視察を実施した。この調査では、実際の活動への参加を通して、若い世代が活動する団体ではどのような交流がなされているのか、それぞれの活動の特徴について把握することを目的とした。

II. 富山県ウェルビーイング指標における比較

富山県のウェルビーイング指標の「生きがい・希望実感」、「地域との繋がり」、「富山県との繋がり」に関する項目で、交流の場に参加をしている学生を対象にアンケートを実施して、富山県一般の20代の回答結果と比較分析を行った。また、同世代での交流が中心となるSketch Labの学生研究員と異世代交流を推進するあなろまっち運営メンバーへのアンケート結果を比較することで、交流の場に参加するメンバーの構成による影響についても分析を行った。

III. インタビュー調査

同世代交流と異世代交流における効果や特徴の違いを明らかにするために、Sketch Labの学生研究員と

あなろまっち運営メンバーへのインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、活動を始めた動機、活動に期待していたこと、達成したいこと・得たいこと、活動していて印象的な出来事・経験、活動を始める前後で変わったこと、達成感を感じた瞬間や嬉しかった出来事、学んだこと・気付いたこと、今後の目標について質問した。これらを分析する視点として、異世代交流に関する研究¹から、①地域社会の帰属意識や愛着の醸成、②地域の歴史や文化について学ぶ機会、③社会性や主体性の向上、④自己効力感の高まりの4点を用いた。

IV. 交流イベントの実施

上述した調査結果をもとに、異世代交流のイベントを実施した。本事業では、若い世代と高齢者の交流の障壁を壊すためのイベントとして、「パークゴルフ」を通じた交流を企画した。イベントは、11月10日および11月25日の2回、婦中パークゴルフ協会の協力を受けて実施し、交流の効果については参加者からの感想を分析した。

4. 調査研究の成果

I. 若者による交流の場を運営している団体への視察

若い世代が交流している「場」の調査として、Sketch Lab、寄処、みらいのめ、鶴坂地域食堂、あなろまっち、トミコエの6団体が開催している交流イベントに参加し、どのような交流が行われているのか観察し、考察した。

Sketch Labは富山市が整備した会員制コワーキング&イベントスペースである。将来起業を考えている学生や地域課題の解決にチャレンジしたいという学生のうち、Sketch Labの運営であるとやま未来共創チームが認めた者は、学生研究員として活動が出来る。本調査では学生研究員が開催した地域づくり交流会に参加した。

寄処は富山県内の大学生が運営しているゲストハウスである。特徴としては、共用スペースで様々なバックボーンを持つ宿泊者、学生が集まり、話をしたりボードゲームをしたりして交流が生まれる場となっていることである。本調査では月一回程度で開催される交流イベントに参加した。

みらいのめは射水市で地域住民が自分たちの課題に向き合い、多様な人が繋がることで解決策を生み出していくことを目的とした団体である。本調査では射水市に移住した移住者や移住を検討している人、地元の公務員や学生を対象とした交流イベントに参加した。

鶴坂地域食堂は富山市婦中町鶴坂地区で住民同士の交流機会を提供するために富山国際大学の学生と地元住民が協力し、定期的に食事とレクリエーションを提供している団体である。本調査では定期開催されている地域食堂に運営として参加した。

あなろまっち富山県内の大学生が立ち上げ、運営している学生団体である。学生が地域に愛着を持つきっかけとして、地域のシニアと交流する機会を定期的な交流イベントで提供している。本調査では運営として交流イベントに参加した。トミコエは富山県内の大学生の声を公式ライン等でのアンケートから拾い上げ、企業や自治体と協力し、学生に還元する学生団体である。本調査では定期的開催している学生の交流会に参加した。

6つの団体のイベントに参加から、以下が推測された。

- ① Sketch Labや寄処、トミコエは学生が企画し、学生が参加するイベントが多く、学生同士という心理的安全性がある中で交流指している場が多くあり、夢や目標を実現する場、仲間づくりの場として「生きがい・希望」や「若者間の繋がり」に対する効果が期待できる。
- ② 学生同士や同年代が集まりやすい団体は、異世代交流が行われているあなろまっちや地域食堂と比べると、「地域の課題」に関する話題が数は少なく、「地域」「富山」との繋がりへの意識が低い傾向にある。

これらの視察結果を踏まえ、本事業では、若者が「交流の場」に参加することの効果および同世代交流と異世代交流の特性の違いを分析するために、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。

II. 富山県ウェルビーイング指標における比較

富山県のウェルビーイング指標である「生きがい・希望実感」「地域との繋がり」「富山県との繋がり」の3つの観

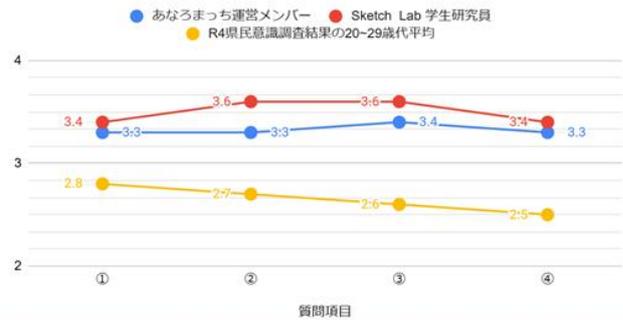
¹田渕恵, 三浦麻子(2019)「創造的課題における高齢者と若年者の世代間相互作用の特徴」『老年社会科学』41(3), 322-332. 日本老年社会科学会

六角薫(2019)「多世代共生のまちづくりの実践事例—成果と課題—」『日本家政学会誌』38,15-27. 一般社団法人日本家政学会

点を軸に、アンケート調査を実施した。調査対象は、同世代交流を主体とする学生研究員 10 名と異世代交流を推進するあなろまっち運営メンバー10名の計20名を対象とした。

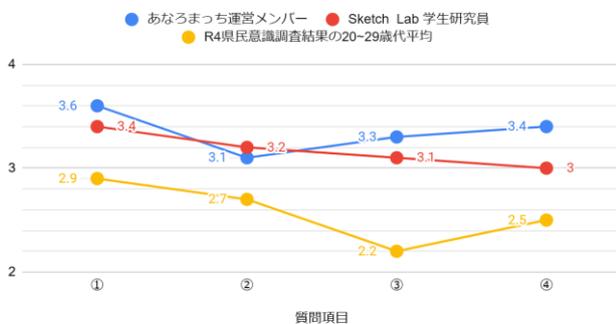
生きがい希望実感(表4-1)の観点で見ると、あなろまっち運営メンバーと学生研究員は、20~29歳代平均と比べて数値が全体的に高い傾向が見られる。特に、「様々な困難があっても、乗り越えていくことができると感じている」の項目では、20~29歳代平均の2.7を大きく上回っており、挑戦意欲や自己効力感が強いことがうかがえる。次に、「地域との繋がり」(表4-2)の観点で見ても、あなろまっち運営メンバーと学生研究員は、20~29歳代平均と比べて数値が全体的に高いことが特徴的である。特に、「地域での人間関係は良好である」の項目では、あなろまっち運営メンバーが3.6と最も高い数値を示し、地域での良好な関係性を強く感じていることがわかる。最後に、「富山県との繋がり」(表4-3)の観点で見ると、あなろまっち運営メンバーと学生研究員は、20~29歳代平均と比べて「富山県との繋がり」に関する評価が全体的に高いが低い数値の項目もあった。高い項目では特に、「あなたの意見や価値観を理解・尊重してくれる環境がある」で20~29歳代平均を大きく上回っており、富山県での自己実現や成長の機会をより強く感じていることがわかる。一方で、「富山県での暮らしに不安はない(防災・防犯)」の項目では、運営メンバーが比較的高い数値を示しているのに対し、学生研究員は20~29歳代平均を下回っており、防災や防犯面での不安を抱えている可能性があった。

表4-1生きがい・希望感
交流をしている学生の平均と富山県の20代平均との比較



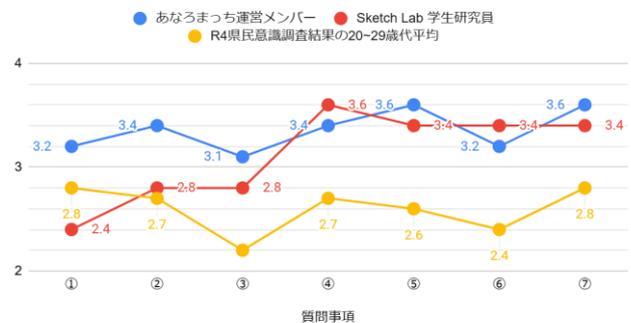
生きがい希望実感 質問事項
①自分が行っていることに、やりがい・生きがいを感じている。
②様々な困難があっても、乗り越えていくことができると感じている。
③夢や目標に向かって、チャレンジや努力をしている
④将来に、期待や楽しみ、ワクワクする気持ちを感じている。

表4-2地域との繋がり
交流をしている学生の平均と富山県の20代平均との比較



地域との繋がり 質問事項
①地域での人間関係は良好である。
②困った時や苦しい時に、地域の方は助けてくれると感じる。
③地域には、楽しい、嬉しいなど(ポジティブな)明るい気持ちになることができる場所や機会が多くある。
④地域の方は、あなたの意見や価値観を理解・尊重してくれる。

表4-3富山県との繋がり
交流をしている学生の平均と富山県の20代平均との比較



富山県とのつながり
①富山県での暮らしに不安はない(防災・防犯)
②富山県での暮らしに不安はない(医療・福祉)
③富山県での暮らしに不安はない(移動・交通)
④全体として、あなたの意見や価値観を理解・尊重してくれる環境がある
⑤全体として、あなたが成長するための学びや経験できる環境がある
⑥富山県の未来に、期待や楽しみ、ワクワクする気持ちがある
⑦富山県ならではの自然や食、文化等に愛着や誇りがある

次に、同世代での交流が中心となる Sketch Lab の学生研究員と異世代交流を推進するあなろまっち運営メンバーへのアンケート結果を比較した。生きがい希望実感(表4-1)の観点で見ると、あなろまっち運営メンバーは「様々な困難を乗り越えられると感じている」で高い評価を示し、異世代交流が実践的な問題解決能力を培う要因となっていることがうかがえる。一方、学生研究員は「夢や目標に向かってチャレンジや努力をしている」の項目が特に高く、自由な活動環境や同世代間の協働が挑戦意欲を高めていることが考えられる。次に、「地域との繋がり」(表4-2)の観点で比較すると、あなろまっち運営メンバーは「地域での人間関係は良好である」の項目で高い数値であった。これは、異世代交流の場が、学生と地域住民との信頼関係を築く役割を果たしていることを示唆している。一方で学生研究員は「地域には楽しい、嬉しいと感じられる場所や機会が多い」の項目が高い数

値であった。しかし、「困った時や苦しい時に地域の人が助けてくれる」という項目ではやや低い数値を示しており、地域全体との直接的な繋がりや支援関係の構築に課題があることが考えられる。最後に「富山県との繋がり」の観点について、あなろまっち運営メンバーの数値は、全項目で 3.1～3.6 と高い水準を示しているが、この結果には、あなろまっち運営メンバーのうち富山県出身者が 8 割を占めていることが影響している可能性にも留意が必要である。一方、学生研究員の数値は、全項目で 2.8～3.6 の範囲を示しているが、特に「富山県での暮らしに不安はない(防災・防犯)」や「富山県での暮らしに不安はない(医療・福祉)」といった項目では評価が低かった。これは、学生研究員の多くが県外出身者であり、地元に対する馴染みが薄いためと考えられる。今回アンケートに回答した学生研究員は県外出身者が多かったため、Sketch Lab での取り組み自体が地域活動として認識され、一方で、富山県との繋がりという意識が希薄であったのではないだろうか。富山県出身学生と県外出身学生の「地域」における認識の違いが、アンケート結果に影響を与えていた可能性も無視できない。

III. インタビュー調査

アンケート調査から考察された異世代交流と同世代交流の特徴を明確化するために、インタビュー調査を実施した。対象はあなろまっちの運営に携わる大学生 4 名、Sketch Lab の学生研究員として活動する学生 3 名で、活動への動機や期待、達成感などの質問を行った。(表 4-4)

活動を始めた動機について、あなろまっち運営メンバーは、普段接することのない高齢者世代との交流や地域社会への貢献、新鮮な経験を求めたことがきっかけだった。一方、学生研究員は、起業家への憧れや探究学習への興味、市役所や家庭からの誘いといった外部要因が主な動機となっていた。

活動への期待については、あなろまっち運営メンバーは、異世代交流を通じた達成感や技術的な経験の獲得を期待していたのに対し、学生研究員は、新たな仲間との出会いやビジネスの視点を学び、行動を通じて成果を生み出すことを目標にしていた。達成したいこと・得たいことについても、あなろまっち運営メンバーは、高齢者に寄り添うコミュニケーションスキルや地域の多様な価値観の理解を重視していたのに対し、学生研究員は、社交力やクリエイティブな思考を活かして新たな学びを得ることを目指していた。両者ともスキルの獲得や多様な価値観の理解を共通の目標としていたが、そのアプローチには違いが見られた。

活動で印象的だった出来事についても、あなろまっち運営メンバーは、高齢者が主体的に関わることで地域の交流が深まる瞬間や、参加者の熱意を感じた経験を挙げていた。学生研究員は、ビジネスプランコンテストでの成功や悔しさから得た学びを挙げ、活動の中で新たな視点を得たと語っていた。また、活動による変化については、あなろまっち運営メンバーは、地域や高齢者との関わりを通じて、他者を尊重する姿勢や積極的なコミュニケーション力が向上したと感じているのに対し、学生研究員は、挑戦する勇気や失敗を恐れない姿勢が身についたと述べており、それぞれ異なる形での自己成長を実感していた。達成感を感じた瞬間についても、あなろまっち運営メンバーは、高齢者や学生から感謝の言葉をもらい、イベントでの役割を果たしたときに達成感を得たと述べている。学生研究員は、自分のアイデアが形になり、仲間と成果を共有したときに大きな喜びを感じたと答えており、他者との協力を通じた成功体験が活動の原動力になっていることが共通点として見られた。

活動を通じて学んだこと・気づいたことについても、あなろまっち運営メンバーは、地域や世代間の違いを楽しみ、相互理解を深めることの価値を学んだと述べているのに対し、学生研究員は、失敗を恐れない姿勢や新しい環境での学びの楽しさに気づいたと答えていた。今後の目標についても、あなろまっち運営メンバーは、高齢者との交流をさらに広げ、地域課題の解決を目指し、県内外で活動を展開することを掲げている。一方、学生研究員は、教育の新しい可能性を探求し、次世代の学びを支援することを目指しており、両者とも活動を通じて得た成果を広く社会に還元し、多くの人に影響を与えたいと考えている点では共通していた。

以上のインタビュー結果を、先行研究より異世代交流の意義として抽出した①地域社会の帰属意識や愛着の醸成、②地域の歴史や文化について学ぶ機会、③社会性や主体性の向上、④自己効力感の高まりの 4 つの観点から、あなろまっち運営メンバーと学生研究員の活動を比較した。(表 4-5)

まず、「地域社会の帰属意識や愛着の醸成」の観点では、あなろまっち運営メンバーは地域住民との交流を

表 4-4 インタビュー概要

列 1	所属	時期	時間
A	あなろまっち運営メンバー	2024 年 12 月 26 日	37 分
B	あなろまっち運営メンバー	2024 年 12 月 26 日	38 分
C	あなろまっち運営メンバー	2024 年 12 月 28 日	39 分
D	あなろまっち運営メンバー	2024 年 12 月 29 日	29 分
E	Sketch Lab 学生研究員	2024 年 12 月 27 日	30 分
F	Sketch Lab 学生研究員	2024 年 12 月 28 日	34 分
G	Sketch Lab 学生研究員	2024 年 12 月 29 日	28 分

通じて地域の一員としての意識を強め、帰属意識を深めている。「地域の人々を仲間として感じている」と、異世代交流を通じて地域への愛着が強まっていることが読み取れた。学生研究員は地域への思いを持ちながらも、活動の目的を課題解決や自己成長に置いており、地域活動を自己実現の手段として捉える傾向にあった。

「地域の歴史や文化について学ぶ機会」の観点では、あなろまっち運営メンバーは高齢者との対話を通じて地域の文化や歴史を直接学ぶ機会を得ている。「高齢者から新しい経験や知識を学ぶことができた」と、異世代交流が地域の理解を深める貴重な機会となっている。学生研究員はビジネスや課題解決に重点を置いているため、地域文化の学びが副次的なものにとどまっている。「社会性や主体性の向上」の観点では、あなろまっち運営メンバーは異世代交流を通じて柔軟な社会性や対話力を身につけている。「他者の意見を尊重するようになった」との発言からも、異なる価値観を受け入れ、広い視野を持つ社会性が育まれていることが分かる。学生研究員は心理的安全性のある環境で主体性やリーダーシップを伸ばすことに重点を置き、「否定をしない環境で、新しい挑戦を楽しめるようになった」と述べるなど、自ら積極的に行動する力を養っている。

「自己効力感の高まり」の観点では、あなろまっち運営メンバーは、「イベント後に高齢者から感謝の言葉をもらい、自分の可能性を感じた」など、地域の人々との相互作用が自信に繋がっていることが分かる。学生研究員はプロジェクトの成功や課題解決の達成を通じて自己効力感を高める傾向にあった。

表 4-5 異世代交流の意義に関する学生の発言

多世代交流の意義	あなろまっち運営メンバーの発言	Sketch Lab 学生研究員の発言
①地域社会の帰属意識や愛着を醸成する機会となる。	・地域の人々を仲間として感じている。 ・小学校時代の地域の見守り隊の温かい対応が印象的だった。	・地元で活動することで、自分のスキルを伸ばしたいと考えた。
②地域の歴史や文化について学ぶ機会になる。	・シニアから新しい経験や知識を学ぶことができた。 ・シニアの多様性に触れることで、地域の文化の深さを感じた。	・課題解決や新しいアイデアの実践を重視している。 ・ビジネスプランコンテストやプロジェクト型の活動に参加している。
③社会性や主体性が向上する。	・自分の意見だけでなく、他者の意見も尊重するようになった。 ・初対面の人とのコミュニケーションが上手になった。	・否定をしない環境で、新しい挑戦を楽しめるようになった。 ・仲間とともに目標を達成できたとき、大きな満足感を得た。
④自己効力感を高める。	・イベント後にシニアから感謝の言葉をもらい、自分の可能性を感じた。 ・6月に活動を休止する予定だったが、参加者の熱意で継続した。	・ビジネスプランコンテストで成功体験を得た。 ・自分のアイデアが形になり、チームで達成できたときに自信を持った。

IV. 交流イベントの実施

上記の調査結果から異世代交流の効果について明らかにすることが出来た。そこで、異世代交流の在り方について調査するために、「パークゴルフイベント」を企画した。パークゴルフを選択した理由は、誰でも参加しやすく、スポーツを通して心の距離を縮めることができるためである。若者のフィールドに高齢者を招くのではなく、高齢者の得意なフィールドに若者が参加することで参加への障壁を下げることを意識した。イベントは、11月10日(学生8名、地域住民3名)および11月25日(学生6名、地域住民3名)の2回、婦中パークゴルフ協会の協力を受けて実施した。参加者数について、学生はパークゴルフ協会の方に教えて頂きながら共にコースを回った。3時間程度プレーした後に学生とパークゴルフ協会の参加者で、感想を共有する時間を過ごした。後日参加した学生にインタビュー調査をして、交流の効果について分析した。(表 4-6)

表4-6 パークゴルフイベントの効果

パークゴルフイベントに参加した学生は、スポーツを介した異世代交流を通じて地域に対する認識をポジティブに変化させた。これまで同世代交流を中心に活

パークゴルフイベントの効果	イベント参加学生の発言
①地域住民との接点を持つことで認識の変化	・高校以降、自分から地域住民との距離を取っていたことに気づいた。 ・シニアから地域の特色や農業の話聞く中で、地域住民の多様な背景や生活に触れることができた。
②スポーツを通じた自然なコミュニケーションの構築	・パークゴルフはコミュニケーションに適したスポーツである。 ・シニアの指導やお喋りを通じて地域のつながりを感じる事ができた。
③地域コミュニティへの関心の向上	・地域には学生が参加できるコミュニティが多く存在していることに気づいた。 ・シニアの知恵や異なる考え方を学ぶことで、過去の固定観念が更新された。
④世代への理解を促進	・もともとパークゴルフを『シニアのスポーツ』と認識していたが、実際に参加してその認識が変わった。 ・シニアの増加する社会において、お互いに寄り添う必要性を感じた。

動してきた学生にとって、シニア世代との接点は新鮮であり、地域住民に対する固定観念や距離感に変化が見られた。参加者学生は、もともとパークゴルフを「シニアのスポーツ」と認識していたが、イベントへの誘いを受けて参加した。事前には地域住民との交流に不安を抱いていたものの、実際にはシニアの指導やお喋りを通じて地域の繋がりを覚えることができたことと述べている。また、「高校以降、自分から地域住民との距離を取っていたことに気づいた」と語り、スポーツを介した自然なコミュニケーションが関係性を築く上で有効であると認識した。さらに、地域には「学生が参加できるコミュニティが多く存在している」ことに気づき、地元への関心が高まった。参加前には「シニア中心のスポーツ」というイメージを持っていたが、実際にはシニアから地域の特色や農業の話聞く中で、地域住民の多様な背景や生活に触れることができたことと述べている。また、「シニアの知恵や異なる考え

を学ぶことで、過去の固定観念が更新された」と語り、異世代交流の意義を実感している。

イベント参加者のコメントから、スポーツという共通の活動が世代間の壁を取り払う上で重要な役割を果たしたことを認識できた。参加学生は「パークゴルフがコミュニケーションに適したスポーツである」と述べ、参加学生は「シニアの増加する社会において、お互いに寄り添う必要性を感じた」と語った。このように、異世代交流を通じて、学生は地域住民を親しみやすい存在として再認識し、地域に対する固定観念を変化させた。これらの結果は、同世代交流を経験してきた学生が異世代交流を通じて地域への帰属意識や理解を深める可能性を示している。また、スポーツという活動が自然な形で世代間の繋がりを構築する有効な手段であることが分かった。今後、異世代交流を促進する際には、パークゴルフのように親しみやすく参加しやすい活動を通じて地域住民との関係性を強化していくことが効果的であると考えられる。



5. 調査研究に基づく提言

本事業を通して、地域交流する場に参加することは、若者のウェルビーイングの向上に繋がることが明らかとなった。調査から得られた知見を如何にまとめる。

- ① 交流の場に参加している若者は、一般の 20 代よりも「生きがい・希望実感」、「地域との繋がり」、「富山県との繋がり」が高い数値となった。
- ② 同世代交流と異世代交流においては、どちらも「生きがい・希望実感」を得ることができるが、異世代交流の方が「地域」、「富山県」との繋がりを実感しやすく、地域社会への理解と愛着を深める効果が確認できた。
- ③ 高齢者に対して、若者の活動への参加を促すのではなく、高齢者が主体的にかかわることができる活動を実施することで、異世代交流を促進することができた。

6. 課題解決策の自己評価

本事業では、「若い世代のウェルビーイング向上」を課題とし、「生きがい・希望」や「繋がり」の指標に焦点を当て、解決策として「交流の場づくり」に関する調査を実施した。若い世代が中心に活動する団体への視察を通し、「交流の場」に参加することが「生きがい・希望」に繋がることが明らかとなった。また、このような場では、参加者が同世代中心の団体と異世代と交流に価値を置く団体とが存在しており、それぞれに特徴がみられた。

特に、本事業では、異世代交流の意義や交流のあり方、同世代交流との違いに着目し、アンケート調査、インタビュー調査を行った。調査結果から、同世代交流は、学生に主体性や挑戦意欲を高める環境を提供し、仲間と協働することで自己肯定感を高める特性を持ち、異世代交流では、地域住民との直接的な繋がりや信頼関係の構築、地域社会への理解と愛着を深める効果が確認された。この違いは、活動目的や参加者間の関係性によるものであることが明らかになった。

このような異世代交流の効果を踏まえ、「パークゴルフイベント」を実施した。参加者のコメントから異世代交流による地域への帰属意識や理解を深める効果が明らかになるとともに、スポーツという活動が自然な形で世代間の繋がりを構築する有効な手段であることが分かり、今後の異世代交流のあり方として有益といえる。

一方で、本研究にはいくつかの限界がある。調査対象が特定の団体に限られており、小規模であったため、異世代交流と同世代交流の効果をより広範な学生群に一般化するには追加の研究が必要である。また、調査期間が短期間であったため、異世代交流の長期的な影響については十分に評価できなかった点も課題である。今後の研究において、本研究が地域社会の活性化に向けた一助となることを期待する。

謝辞

本事業は、大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究助成事業」を受け実施した。視察にご協力いただいた団体の皆様、アンケート調査にご協力くださった皆様、イベントの実施にご協力いただいた婦中パークゴルフ協会の皆様に感謝の意を表す。